

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベント教会 - 第二十三号

Jeff Pippenger

2026-01-04

二十三番

第二十二回の記事で私はこう書いた。「そして第十一章では、選民の系譜がセムからアブラムに至る十の名によって示されている。第十一章はバベルの塔の物語であると同時に、アブラムによって代表される選民の系譜でもある。第十一章は、神と三重の契約に入ることになる選民を導入している。第三の、そして最後の段階は、第二十二章にあるイサクの献げ物であった。『十一』章がアルファの始まりで、『二十二』章がオメガの終わりである。名の意味のうちに神の声を聞くために要される信仰は、御言葉の数においてその声を聞くために要される信仰と少しも異ならない。」

第十一章では、カインの契約とアベルの契約が提示されている。私たちは長年にわたり、バベルの塔の預言的な特徴が偽の契約を表していることを繰り返して示してきた。洪水の前はエデンの門で礼拝していたが、洪水後には経緯が変わり、礼拝は祭壇で行うこととされた。祭壇には聖書的な具体的要件があった。自然の石で築かなければならず、石を人の手で削ったり刻んだりしてはならない。モルタルを用いず、石の上に石を積み重ねるものでなければならなかった。

塔の目的は、ニムロデの仲間たちに名を作ることであり、その名は品性を表します。塔には、人間が自らを救おうとし、天の神々のように自分を高めようとする姿が見られます。塔は、自分で自分を救えろと思ひ、自らが高められるべきだと考える教会の象徴です。これは、詩篇83編において十人の王たちが、聖書の預言における悪しき同盟が日曜法の時にかかる際に、教皇を担ぎ上げるのと同様です。

アサフの歌、または詩。神よ、沈黙しないでください。口を閉ざさず、じっとしていません。見よ、あなたの敵は騒ぎ立ち、あなたを憎む者たちは頭をもたげています。詩編 83:1、2。

ノアの洪水によって、世界はちょうど滅び去ったところだった。神が洪水前の世界に対する猶予期間の終結を示された理由は、人の思いが絶えず悪に傾いていたからである。聖書は一致についてさまざまに語っており、その一つは「見解が一致する」ことである。二人が同意しなければ、一緒に歩めるだろうか。

さて、兄弟たちよ、私は主イエス・キリストの御名によってあなたがたに勧めます。あなたがたは皆、同じことを語り、あなたがたの間に分裂がないようにしなさい。むしろ、同じ思いと同じ判断において、完全に結び合わされていなさい。コリント人への第一の手紙 1章10節

神がニムロデの王国に対する裁きにおいて言語を混乱させられたとき、その混乱の前には彼らが皆一致しており、したがって皆が同じ性質を持っていたことが示されている。そ

してその性質とは、人間の業に基づく宗教であり、同じ章でアブラハムによって代表される人々とは対照的である。セムはニムロデの時代に忠実な人であった。歴史家たちは、主の御前で強大な反逆者ニムロデを殺したのはセムだと指摘する。歴史家の見解がどうであれ、この点は揺るがない。というのも、セムは契約の人であり、その血統は契約の人ノアにさかのぼり、さらに兄弟アベルに代わって契約の歴史に登場した別の契約の人セツにさかのぼる。アベルもまた契約の人で、アダムの直系の子孫であった。

創世記11章は、いのちの契約と死の契約という文脈における、キリストとサタンの大いなる争いである。ニムロデは「主の前にいる勇敢な狩人」を象徴している。なぜなら、彼は多くの信奉者を抱える教会を表しているからである。セムを通してのアブラムは、わずかな信奉者しか持たない教会を表している。ニムロデが塔を建てていたとき、契約の人はセムであったが、11章の二つの契約を表しているのはセムとニムロデではなく、ニムロデとアブラハムである。パウロはこの預言的な原則を明確に示している。

このメルキゼデクは、サレムの王にして、いと高き神の祭司であり、王たちを打ち破って帰ってきたアブラハムに出会って彼を祝福した者である。アブラハムは彼に、すべてのものの十分の一をも与えた。彼の名はまず「義の王」と解され、その後「サレムの王」、すなわち「平和の王」とも解される。彼には父もなく母もなく、系譜もなく、日々の始まりも命の終わりもなく、ただ神の子に似せられて、絶えず祭司としてとどまっている。見よ、この人がいかに偉大であったことか。族長アブラハムさえも、戦利品の十分の一を彼に献げたのである。

そして確かに、祭司職を受けているレビの子孫たちは、律法にしたがって民から十分の一を取るよう命じられている。すなわち、アブラハムの腰から出た者である彼らの兄弟からであっても。

しかし、彼らの系譜に属していない方は、アブラハムから十分の一を受け、約束を与えられていた彼を祝福した。しかも、異論の余地なく、劣る者は優れた者から祝福を受ける。ここでは死すべき人々が十分の一を受けるが、そこでは、生きておられると証しされている方がそれを受けておられる。言ってみれば、十分の一を受けるレビも、アブラハムにおいて十分の一を納めたのである。というのは、メルキゼデクが彼に会ったとき、彼はまだ父祖の腰の中にいたからである。ヘブル人への手紙 7:1-10。

メルキゼデクの主題には多くの現在の真理があるが、私がここで単に指摘しているのは、パウロが契約の人々の預言的特質について直接教えているという点である。ここでいう「契約の人々」とは、靈感による証言の中で、その聖書の証言が人類に対する神の契約の預言の系譜における道しるべを示している男女を指す。パウロは、メルキゼデクが、シナイでレビ的祭司職が制定されるより前、すなわちレビ的祭司職が存在するより四百年以上も前に生きていたにもかかわらず、レビから十分の一を受け取ったと教えている。レビ的祭司職に属するためには、レビからの血統を証明できるレビ人でなければならなかった。レビはまだ生まれていなかったのだから、メルキゼデクが自分の系譜がレビの系統に属することを示すことはできなかった。

アダムとエバとの神の契約を表す預言の系譜は、実際には二つの契約から成っています。最初は、簡単な試練を伴ういのちの契約でした。墮落とその試練に失敗した後には、衣を

備えるために子羊の血が流されることを含む次の契約が結ばれました。続いて、虹とノア、そして祭壇での礼拝によって表された、人類との神の契約がありました。さらに、創世記11章において、後にヘブライ人と呼ばれる選ばれた民との神の契約が始まりました。これらの物語のそれぞれにおいて、聖書の登場人物たちは契約の男や女なのです。

創世記11章には、選ばれた民とのいのちの契約の始まりが示されており、しかもそれは、ニムロデが死の契約を打ち立てる、まさにその場所で示されています。その死の契約は、祭壇が象徴する「のみを当てない石」と「モルタルを用いないこと」の偽物であるレンガとモルタルによって表されていました。ホワイト夫人は、祭壇はキリストを表すと教えています。したがって、偽りの宗教であるニムロデの宗教は、にせのキリストを表しているのです。

彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作り、よく焼こう。」そして、彼らは石の代わりにれんがを用い、しっくい代わりにアスファルトを用いた。創世記11章3節。

また、もしあなたがわたしのために石の祭壇を築くなら、切り石でそれを築いてはならない。もしそれにあなたの道具を当てるなら、あなたはそれを汚すことになるからである。出エジプト記 20:25

私たちは、聖なるものと俗なるものを混同する危険にさらされている。神からの聖なる火は、私たちの働きに用いられるべきである。真の祭壇はキリストであり、真の火は聖霊である。これこそが私たちの靈感の源である。人が信頼できる助言者となるのは、聖霊がその人を導き、指導するときに限られる。もし私たちが神とその選ばれた者たちから離れて、見知らぬ祭壇に問い尋ねるなら、私たちは自らの行いに応じた答えを受けることになる。Selected Messages 第3巻、300ページ。

他の真理とともに、創世記十一章から預言的に導き出される教訓の一つは、それが預言の系譜の始まりを表しているということである。ノアの洪水は、預言的な分離のしるしとなる。ノアが箱舟を出たとき、新しい礼拝の方式が設けられ、そして礼拝の方式は、カインとアベルの物語に示されているように、常に二種類の礼拝者を生み出す。創世記十一章は新しい世界であり、その始まりの歴史は、神の終わりの日の契約の民が日曜法の危機のさなかに「十一時の労働者」をバビロンから呼び出すときの終わりの歴史の土台となる物語となる。ニムロデは日曜法の危機における不法の人であり、そしてセム、すなわちアブラハムは、その同じ危機における神の人である。創世記十一章の散らしと諸言語の混乱は、ノアが箱舟を出て間もなく始まった。十一章の主題は二つの契約であり、二十二章でアブラハム契約の第三段階が示されるとき、その物語は結末に至る。

第十一章は、第二十二章でオメガの歴史に至るアブラハムの系譜のアルファの歴史である。冒頭のニムロデのバベルの物語と、結末のイサクの献げ物の物語は、いずれも人類に対する最終的な裁きを表している。その流れはニムロデの塔から始まり、イサクの献げ物へと延び、その流れは相反する二つの献げ物によって頂点に達する。ニムロデの献げ物は神の執行的な裁きを受け、アブラハムの裁きは神の祝福を受ける。ニムロデは第十一章のアルファであり、アブラハムは第二十二章のオメガである。オメガは常により大いなるものであり、ヘブライ文字によれば少なくとも二十二倍は大きい。言語を混乱させ、諸国民を全地に散らすことで現れた力も、十字架の力にははるかに及ばなかった。ニムロデの塔

は9/11のツインタワーを表し、イサクの献げ物は日曜法を表している。

選ばれた民との契約の流れは、十一という数字の象徴で始まり、二十二という数字の象徴で終わる。この流れは、ニムロデのアルファ史およびアブラハムのオメガ史における猶予期間の終結で終わる。まさにニムロデとアブラハムの歴史は聖書の第一の書に示されており、それはノアの洪水によるごく最近の破壊からの立て直しという文脈の中に置かれている。聖書の第一の書における二つの契約の例証は、十一章から二十二章に至る流れにおける猶予期間の終結を示す二つの証しを与えている。

不義を行う者は、なおも不義を行え。汚れた者は、なおも汚れたままでいよ。正しい者は、なおも正しくあれ。聖なる者は、なおも聖くあれ。ヨハネの黙示録 22:11

ニムロデはなおも不義で汚れたままであり、アブラハムはなおも義で聖なるままである。これは創世記11～22章のアルファで示されており、また黙示録22章11節のオメガにおいても同様である。猶予期間が閉じる直前に、この書の預言の言葉を封じてはならないという宣言が10節でなされる。猶予期間が閉じる直前のその直後の節で、黙示録には解かれるべき預言があることが示される。十一節の二節後に、キリストがその預言の封印を解く鍵を与えておられる。

彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封じるな。時は近い。不正な者はなお不正であれ。汚れた者はなお汚れたままであれ。正しい者はなお正しくあれ。聖なる者はなお聖なるままであれ。見よ、わたしはすぐに来る。わたしの報いはわたしと共にあり、各人にそのわざに応じて与える。」

わたしはアルファでありオメガであり、初めであり終わりであり、最初であり最後である。黙示録 22:10-13.

第二十二章は、聖書全体におけるオメガの章であり、封印されている黙示録の預言を開く鍵は、黙示録第一章でキリストが最も重要であると示した原則である。第一章はヘブライ文字の第一字に当たり、第二十二章は最後の字に当たる。第一章の九節から十一節で、ヨハネは自らを紹介し、キリストをアルファでありオメガであると述べている。

私はヨハネ。あなたがたの兄弟であり、患難と、イエス・キリストにある御国と忍耐において、あなたがたと共にある者である。私は、神の言葉とイエス・キリストの証のために、パトモスと呼ばれる島にいた。私は主の日に御霊にあって、背後にラッパのような大きな声を聞いた。その声は言った。「わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたがたを見ることを書物に書き、アジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアティラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」黙示録 1:9-11.

11節ではヨハネはパトモスにいるが、12節で彼は振り向き、そこから先は天の聖所にいる。したがって、9節から11節には、イエスをアルファでありオメガである方と示すヨハネの証言が見られる。これは、8節でイエスご自身がすでにそう名乗っておられることである。

わたしはアルファでありオメガ、初めであり終わりである、と、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である主は言われる。黙示録 1:8.

8節では、ヨハネはキリストがご自身について語られたことを聞き、それを書き記している。9節から11節では、ヨハネ自身が自分のことを語っている。これによって、この章の最初の1節から11節には、キリストを「アルファでありオメガである方」と特定する二人の証人がいることになる。9節から11節は、それ自体で一つの思考単位を成している。章全体とはつながっているが、これらの節ではヨハネは自分自身について語っており、一方、4節から8節では、ヨハネは三位一体なる神に代わってご自身の諸教会に語っている。4節は8節で終わる一つの思考単位の始まりである。これは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」としてのキリストの冒頭の描写が4節で示され、さらに8節でも再び示されていることから認められる。

アジアにある七つの教会へ。ヨハネより。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、そして、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの君であるイエス・キリストから、あなたがたに恵みと平安があるように。私たちを愛し、ご自分の血によって私たちの罪を洗い清め、私たちを王とし、祭司として、彼の神であり父である方に仕えさせてくださった方に、栄光と支配が世々限りなくありますように。アーメン。見よ、彼は雲に乗って来られる。すべての目は彼を見るであろう。彼を刺し貫いた者たちも、地上のあらゆる部族は彼のゆえに嘆き悲しむであろう。しかり、アーメン。

「わたしはアルファでありオメガである。初めであり終わりである」と、今おられ、かつておられ、やがて来られる全能者である主は言われる。黙示録 1:4-8。

第一章の最初の三節はイエス・キリストの黙示を提示しており、それは恩恵期間が終わる直前に封印が解かれる。というのも、第三節に「時が近い」とあるからである。「時が近い」というのは、第二十二章十節の「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近いからである」と同じ表現である。封印が解かれるその預言は、イエス・キリストの黙示である。

第4節から封印が解かれ始まり、その第4節は「私ヨハネは」というヨハネの証しで始まる。そして第8節では、ご自身を明らかにしているのはキリストである。五つの節の最初には人間の証しがあり、最後には神の証しがある。第4節は天の父を「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」として示し、第8節はキリストを「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」として示している。

イエス・キリストの黙示の封印を解く鍵は、アルファとオメガの原理である。最初であり最後である方として、キリストは過去におられ、将来おられるだけでなく、現在にもおられる。イエスも御父も、「かつてあり、今もあり、やがて来られる神」であるという事実は、キリストをアルファとオメガとして示す別の表現である。彼はアルファでありオメガ、最初であり最後、初めであり終わりであり、初めにおられ、終わりにもおられる。カイサリア・ピリピで教会に与えられた「御国の鍵」は、イザヤ書22章22節でエリヤキムの肩に置かれた「鍵」でもある。黙示録のアルファは第1章、オメガは第22章であり、したがって黙示録の諸章の中にヘブライ語アルファベット全体を見いだす。第13章はアメリカ合衆国の反逆、そしてその後の世界の反逆を表している。第1章はキリストをアルファとオメガとして提示し、第22章は同じ真理を、第1章で言及される封印が解かれることと結びつけて明らかにしている。第1章、第13章、第22章は、合わせて「真理」という語を

成す三つのヘブライ文字を表している。

マタイによる福音書第23章で、イエスはパリサイ人とサドカイ人に対して八つの災いを宣告しています。第22章の最終節で、キリストと理屈をこねるユダヤ人たちとのやり取りは、ダビデの謎をもって終わりました。これは、アルファでありオメガであるという原理を理解してはじめて解ける謎です。

ファリサイ派の人々が集まっていたとき、イエスは彼らに尋ねて言われた。「あなたがたはキリストについてどう思うか。彼は誰の子か。」

彼らは彼に「ダビデの子」と言った。

彼は彼らに言った。「では、ダビデは霊によってどのように彼を主と呼んでいるのか。『主はわが主に言われた。「わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」』と。もしダビデが彼を主と呼んでいるのなら、どうして彼がダビデの子であり得ようか。」

そして、誰も彼に一言も答えることができず、その日から後は、誰一人として彼にこれ以上何も質問しようとはしなかった。マタイ 22:41-46。

第二十二章の結びは、契約史における一つの道しるべを指し示している。エレミヤもまた、この真理の筋を取り上げている：

主の言葉がエレミヤに臨んだ。「主の家の門に立ち、そこでこの言葉を宣べ、こう言え。『主を礼拝するためにこれらの門から入るユダのすべての者よ、主の言葉を聞け。万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる。あなたがたの道と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの所に住ませる。『主の宮だ、主の宮だ、主の宮だ』という偽りの言葉に頼るな。』」

もし、まことにあなたがたが自分の道と行いを改め、まことに人とその隣人との間に公正な裁きを行い、寄留者と孤児とやもめを虐げず、この所で罪なき者の血を流さず、また自分の害となるようにほかの神々に従って歩まないなら、そのとき、わたしはあなたがたを、この所、あなたがたの先祖に与えたこの地に、とこしえまでも住ませる。見よ、あなたがたは何の益にもならない偽りの言葉に頼っている。あなたがたは、盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、あなたがたの知らないほかの神々に従い歩き、そして、わたしの名によって呼ばれるこの家に来てわたしの前に立ち、「これらすべての忌むべきことを行うために、私たちは救われたのだ」と言うのか。

わたしの名をもって呼ばれているこの家が、あなたがたの目には強盗の巢窟となったのか。見よ、わたし自身、それを見た、と主は言われる。しかし今、初めにわたしが名を置いたシロにあったわたしの所へ行き、わたしの民イスラエルの悪のゆえに、わたしがそれに何をしたかを見よ。

今、あなたがたがこれらすべてのことを行ったゆえに、と主は言われる。わたしは朝早くからあなたがたに語り続けたが、あなたがたは聞かなかった。わたしは呼んだが、あなたがたは答えなかった。それゆえ、あなたがたが信頼している、わが名によって呼ばれているこの家に、また、わたしがあなたがたとあなたがたの先祖に与えたこ

の所にも、わたしがシロにしたようにしよう。わたしはあなたがたをわたしの前から投げ捨てる。あなたがたのすべての兄弟、すなわちエフライムの全子孫を投げ捨てたように。それゆえ、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫びや祈りをささげてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの声を聞かないからである。エレミヤ書 7:1-16.

エレミヤは、古代イスラエルのために祈ってはならないと告げられた。彼らは取り返しのつかない段階に達しており、第二十二章の終わりに登場する詭弁を弄するユダヤ人たちも同様であった。契約の人であるモーセが、選ばれた契約の民を滅ぼすという神の決定に直面したとき、モーセは祈りによって執り成した。ところが第七章では、エレミヤはまさにその同じ契約の民のために祈ってはならないと言い渡される。シロの預言的歴史は、彼らの罪が贖いようのない段階に達したときに神が選ばれた契約の民を退けることの積み重なる証拠として、一節に表されている。

エフライムは偶像に結びついている。彼を放っておけ。ホセア書 4:17.

契約の歴史において、神がご自分の契約関係を終わらせる時点は、一つの明確な道標となる。第十の試みとなったヨシュアとカレブの報告の拒否も、別の例である。また、数章後には、エレミヤにこの民のために祈ってはならないと告げられる。

それゆえ、あなたはこの民のために祈ってはならない。彼らのために叫びも祈りもささげてはならない。彼らとその苦難のゆえにわたしに叫ぶとき、わたしは彼らに耳を傾けないからである。エレミヤ書 11:14

第七章では、シロアの象徴で表されているように、日曜法の時にラオディキア人が吐き出されることが、彼が近い将来に「行う」ことを示している。

それゆえ、わたしは、わたしの名によって呼ばれていて、あなたがたが頼みとしているこの家に対して、また、あなたがたとあなたがたの先祖に与えたこの所に対しても、シロにしたとおりに行う。そして、わたしは、あなたがたをわたしの前から追い出す。わたしが、あなたがたの同胞、すなわちエフライムのすべての子孫を追い出したように。だから、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫びも祈りもささげてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの声を聞かないからである。エレミヤ書 7:14-16.

第十一章では、祈ってはならないという命令は、日曜法に続く艱難の時に自分たちが身を置いていることに気づいたとき、ラオデキア人を襲う恐怖に関するものである。彼らが経験するその恐怖は、彼らの契約拒絶の歴史の中に位置づけられている。

この契約の言葉を聞け。ユダの人々とエルサレムの住民に語れ。彼らに言え、
イスラエルの神、主はこう仰せられる。

この契約の言葉に従わない者は呪われよ。これは、わたしがあなたがたの先祖に、彼らをエジプトの地、鉄の炉から連れ出したその日に命じて言ったこと、すなわち「わたしの声に聞き従い、わたしがあなたがたに命じるすべてにしたがってそれらを行え。そうすれば、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる」と

いうことである。これは、わたしがあなたがたの先祖に誓った誓い、すなわち乳と蜜の流れる地を彼らに与えるという誓いを果たすためであり、今日この日あるとおりである。

そこで私は答えて言った、「しかり、主よ。」すると主は私に言われた、

ユダの町々とエルサレムのちまたで、これらすべての言葉を宣べて言え。「この契約の言葉を聞き、それを行え。わたしは、あなたがたの先祖に対して、わたしが彼らをエジプトの地から連れ上ったその日から今日に至るまで、朝早くから繰り返し警告して、『わたしの声に従え』と言ってきた。だが彼らは従わず、耳を傾けもしないで、おのおの自分の悪い心の思いに従って歩んだ。それゆえ、わたしはこの契約のすべての言葉-行うようにとわたしが命じたのに、彼らは行わなかったその言葉-を彼らにもたらず。」

そして主は私に言われた。「ユダの人々とエルサレムの住民の間に陰謀が見いだされた。彼らは、私の言葉を聞くことを拒んだ先祖たちの不義に立ち返り、ほかの神々の後を追ってそれらに仕えた。イスラエルの家とユダの家は、私が彼らの先祖と結んだ契約を破った。」

それゆえ、主はこう言われる。「見よ、わたしは彼らに災いをもたらず。彼らはそれから逃れることができない。彼らがわたしに叫び求めても、わたしは彼らに耳を傾けない。するとユダの町々とエルサレムの住民は行って、香をたいているその神々に叫ぶだろうが、その苦難のとき、それらは彼らをまったく救い出せない。ユダよ、おまえの神々はおまえの町の数だけあり、エルサレムの通りの数だけ、おまえたちはその恥ずべきもののために祭壇を築いた。すなわち、バアルに香をたく祭壇である。」

それゆえ、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫びや祈りを捧げてはならない。彼らがその苦難のときにわたしに向かって叫び求めても、わたしは彼らに耳を傾けないからである。エレミヤ書 11:1-14。

十四万四千人の中に加えられる候補者たちの復活は黙示録11章11節に示されており、彼らの最終的な集結はイザヤ書11章11節に示されており、また、竜と獣と偽預言者の外的な系統はダニエル書11章11節に示されている。毒麦に対する日曜法の裁きはエゼキエル書11章11節に示され、愚かなおとめたちに臨む罰と恐れはエレミヤ書11章11節に示されている。

この民のために祈るなという命令は、マタイによる福音書22章の末尾にある道標であり、23章はアドベンティズムに対する八つのわざわいを指し示している。23章は1844年10月22日、あるいは日曜法である。それら二つの道標はいずれも結婚の成就であり、その結婚は花嫁と夫の間のもので、彼らは一体となる。結婚の完成は贖い、すなわち「at-one-ment」を表す。人間は神のかたちに創造され、神は男と女を創造された。彼らの子孫は、男性由来の23本の染色体と女性由来の23本の染色体によって示される。両者が合わさった46本の染色体が神殿を形作る。おのおのが神殿である。あなたがたは主の宮であることを知らないのか。

結婚の成就、すなわち二人が一体となることは、二十三から成る二つの神殿が結び合わされ、四十六から成る一つの神殿を形成することである。キリストは神殿を建てる方であ

り、ご自分の教会を、ご自分の男性の神殿と結び合わされるべき女性の神殿として建てる。その結合は、人間の神殿が神の神殿の至聖所において神性と結び合わされるときに起こる。「二十三」は十四万四千人の封印の象徴であり、その働きは二千三百年の預言の終わりに始まった。マタイ二十三章は、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストに対する宣告であり、彼らは十四万四千人の偽物である。

十四万四千人は、七に属する八番目であり、彼らは第八日に復活する者たちである。彼らはノアの箱舟にいた八人であり、セツの子孫である八人でもある。彼らの額の印は、第八日に行われた割礼によって型として示されていた。彼らは第八日に奉仕のために油注がれる祭司であり、第二十三章におけるアドベンチズムへの八つの禍いの宣告は、偽りの八に対する宣告である。

愚かなおとめたちへの災いの宣告は、二十二章の最後の節で、神の民の封印に続いている。二十二章は創世記の二十二章に対応している。というのも、旧約聖書の第一の書は新約聖書の第一の書を予表しているからである。マタイによる福音書の十一章から二十二章までの預言的な流れは十二章を成し、その十二章のうち六番目に当たるのが十六章で、そこでシモン・バルヨナの名がペテロに改められた。

また、わたしはあなたに言う。あなたはペテロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を建てる。黄泉の門はこれに打ち勝つことはない。マタイ 16:18

マタイによる福音書の11章から22章には459節あります。中央の節は16章17節ですが、その節は18節と19節から切り離すことはできません。これらは一つの文だからです。

するとイエスは彼に答えて言われた。「バルヨナのシモンよ、あなたは幸いです。あなたにそれを明らかにしたのは肉と血ではなく、天におられるわたしの父です。さらにあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。黄泉の門もこれに打ち勝つことはできません。わたしはあなたに天の御国の鍵を授けます。あなたが地上で結ぶものは何でも、天においても結ばれます。あなたが地上で解くものは何でも、天においても解かれます。」マタイによる福音書 16:17-19

11章から22章までのちょうど中心には、キリスト教の基礎となる契約の宣言がある。その宣言の中で、シモンの名はペテロに改められるが、英語の各文字が持つ数値（たとえば「a」は1、「z」は26）を当てはめると、「p」は16、「e」は5、「t」は20、もう一つの「e」は5、「r」は18となる。16×5×20×5×18を掛け合わせると144,000になり、契約関係の象徴であるペテロへの改名の記述は16章18節にある。そしてペテロの英語綴りの最初の文字は16で、最後の文字は18である。これらすべては、11の象徴で始まり22の象徴で終わる12の章の中心にある。

その線は創世記の11章から22章にも見いだされ、その線には305節があるため、その線の中心は17章11節であると特定される。旧約聖書の第一の書の12章から成るその線は、アブラハムとの契約を示すとともに、新約聖書の第一の書の同じ章においてオメガの線と出会うアルファの線を表している。マタイにおけるオメガの線の中心は、十四万四千人の契約関係の最高潮であり、彼らは日曜法において掲げられる契約のしるしである。創世記の線の中心節は、中心節そのものを示すだけでなく、アブラハムとの三段階の契約の第二

、すなわち中間の段階をも特定し、同じく重要な契約のしるしも特定している。

あなたがたは包皮の肉に割礼を施さなければならない。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。創世記 17:11.

これらの内容は次回の記事で続けます。

すると、彼が塵やごみ、偽物の宝石や贋金を掃き払っているうちに、それらは皆、雲のように舞い上がって窓から外へ出ていき、風に運ばれていった。その騒ぎのさなか、私はほんの一瞬目を閉じた。目を開けると、ごみはすっかりなくなっていた。貴重な宝石やダイヤモンド、金貨や銀貨が、部屋じゅうに溢れるほど散らばっていた。

彼はそれから、前のものよりはるかに大きくていっそう美しい小箱をテーブルの上に置き、宝石、ダイヤモンド、硬貨を一握りずつかき集めてはその小箱に投げ入れ、いくつかのダイヤは針の先ほどの大きさしかなかったにもかかわらず、一つも残らなくなるまで続けた。

そして彼は私に「来て見なさい」と呼びかけた。

私は小箱の中をのぞいたが、その光景は目がくらむほどだった。それらはかつての輝きの十倍もの光を放っていた。私は、ちりの中にそれらをまき散らし踏みにじったあの邪悪な者たちの足によって、砂でこすられ磨かれたのだと思った。それらは小箱の中に美しい秩序で並べられ、ひとつひとつがあるべき場所にあり、投げ入れた人が苦労した形跡は少しも見えなかった。私はあまりの喜びに叫び、その叫びで目が覚めた。『初期の著作』83頁。

「あなたがたは主の再臨をあまりにも先のことと考えすぎている。私は、後の雨が真夜中の叫びのように[突然に]降り、その力は十倍であったのを見た。」 Spalding and Magan, 5.

王が彼らに尋ねた知恵と理解に関するすべての事柄について、王は、彼らが自分の全王国にいるすべての呪術師や占星術師よりも十倍も優れていることを見出した。ダニエル書 1:20.